



## 「文化遺産を未来につなぐ森づくり」 5周年記念シンポジウム

日本の木造文化財を守るシステム構築を目指して立ち上げられた  
「文化遺産を未来につなぐ森づくりの為の有識者会議」  
発足5年目を記念するシンポジウムが  
6月17日(日)に、東京大学弥生講堂で行われました。



## シンポジウムのテーマは「もり・こころ・わざ」

第一部では、まず理事の加藤鐵夫氏から、「文化遺産を未来につなぐ森づくりの為の有識者会議」のこれまでの議論を取りまとめた「提言」についての内容説明が行われました。加藤氏は提言として、文化財修理用部材の需給量を把握すること、将来的にも安定した文化財修理用部材を確保するために、利用可能な天然林のみに頼るのではなく、人工林において大径材の生産を可能とする森林づくりを推進すること、私林についても文化財修理用部材の提

供を目的とした森林登録制度導入の検討をすること、高品質な大径長尺部材を確保するために、超長伐期の育林についての考え方や技術的指針を取りまとめること、大工技術の向上と伝承を図ること、の五つを挙げ、それぞれの必要性を語りました。

次に、林野庁から「木の文化を支える森づくり」、文化庁から「ふるさと文化財の森」、京都府（社団法人京都モデルフォレスト協会）から「京都モデルフォレスト運動」が紹介されました。

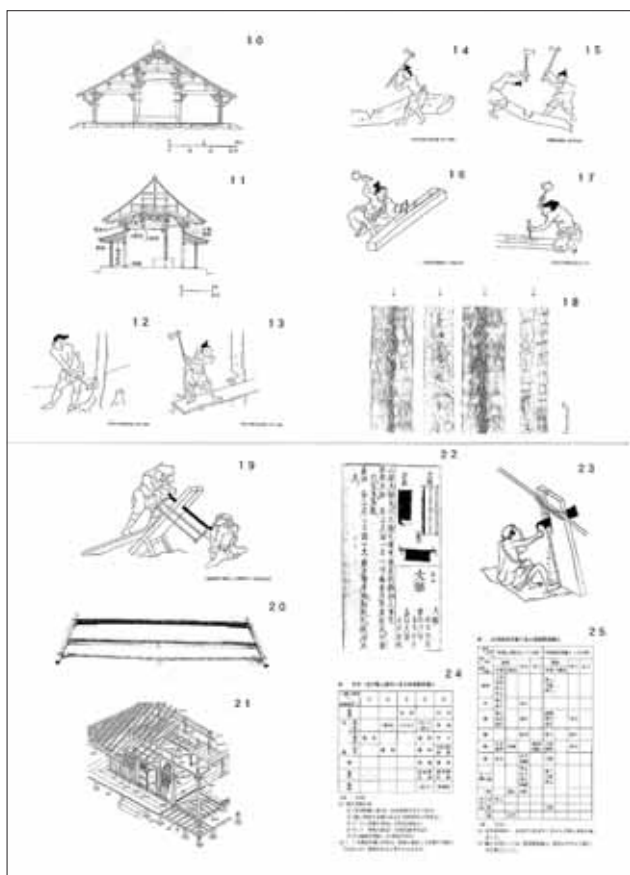
第二部は、聖護院門跡五二代門主・本山修験宗管長である宮城泰年氏に

よる「修験からみた日本の心」からスタート。山野において、靈験のある法力を身につける修験に見る日本人の自然観、精神的世界が取り上げられました。

続いて財団法人竹中大工道具館学芸部長兼首席研究員の渡邊晶氏による「木の建築をつくる技術と道具の歴史」についての講演。木造建築の技術と道具の歴史を紐解いたうえで、現代において手道具を用いる意味について考察が行われました。

締めくくりにパネルディスカッション「伝統建築の技を伝えるにはその方法をさぐる」では、大工でありNPO法人日本伝統建築技術保存会会長の西澤政男氏から提議された、文化財修理工事における現状の問題点を題材として、各方面の専門家が活発な議論を戦わせました。文化財修理の専門業者ではなく、あえて現地の大工を中心としたチームに発注することが底辺を広げていくこととなる」など、貴重な発言が数多く出されました。

今回のシンポジウムは「文化遺産を未来につなぐ森づくりの為の有識者会議」の五年間の成果を確認し、今後進むべき方向を見定めるうえで、実り多いものとなったようです。



右上：聖護院門跡52代門主・本山修験宗管長の宮城泰年氏  
左上：会場となった東京都文京区にある東京大学弥生講堂  
左下：渡邊晶氏が講演に使った参考資料。木造建築の技術と道具の歴史が詳細にまとめられていました